

The ‘Protective’ Hand of *Ethelberta*

——Ethelbertaの人物造形についての一考察——

堀 川 史 子

I

Thomas Hardy (1840-1928) による *The Hand of Ethelberta* (1876) (以下、HE と記す) は、彼の他の大作に比類する壮大さ、重厚さ、悲劇性には欠けるかもしれないが、読者を惹き付ける不思議なところを持つ作品である。この小説の魅力の重要な原因の一つが主人公 Ethelberta であることに間違い^①はあるまい。事実、低い評価が定着してしまっている小説でありながら、主人公 Ethelberta には何かがある、という思いが多くの読み手に共有されているのは興味深いことである。HE の欠点を羅列することに執心していると思われる批評家でさえも、彼女の人物に何らかの深みや複雑さを直感的に嗅ぎ取り、そこに Hardy の偉大さの片鱗を垣間見る (Gittings 1975, 27-28)。だが、その重要性が認められながらも、HE は失敗作であるという固定観念に阻まれてか、こういった言及の後にこの主人公についての掘り下げた検討が続くことは殆どない。後述するように、Ethelberta の人物に焦点を合わせた議論においてさえも、小説全体を見渡して判断するという視点に欠けていたり、論者のイデオロギーに左右された偏ったものになってしまっていることが多い。特に、下層階級出身であることを隠して自らの文学的才能と結婚で社会的成功を図る主人公 Ethelberta と作者 Hardy を重ね合わせ、HE の中に Hardy の非常に私的な自伝的要素を見い出そうとするテキスト外的要因への考慮が先行してしまい、テキスト内で言語の働きにより人物が創造されていくその過程を包括的に調べよう、という姿勢は大凡とられてこなかった^②と言ってよいであろう。

HE の全体に底流するテーマについては、上流階級への批判、文壇の要求するコンベンションへの反抗、物語の虚構性に対する作者の強い自意識、と

いったことが指摘されてきた (Wing 1972, 567; Dolin, 26; Widdowson, 48, 92)。これらの要素は見逃すことができないものではあるが、筆者は、それ以外に、というよりはむしろこの作品の骨子となっているのは、Hardy が彼の方の小説で行っていること、すなわちある女性像の描出ではないか、と考えるのである。Ethelberta ほど、彼女は誰なのか、一体どのような人物なのか、次に何をするのだろうか、とそのアイデンティティと性格が他の作中人物達に問われ話題になっている登場人物も少ない。物語は、Wessex の町 Anglebury の旅館から散歩に出てきたうら若い美しい Petherwin 未亡人 (Ethelberta) を目にした牛乳配達屋と馬丁が彼女についての噂話をしている場面から始まり、最後は、祖父ほどに年齢の差のある Mountclere 子爵と結婚した Ethelberta について、彼女の元恋人の Christopher と彼女の家族が語り合っている場面で幕が閉じられる。小説中では、読者は、Christopher と彼の妹 Faith が Ethelberta の人物について意見を交わし合ったり、各々の心の中で考えている場面に何度も出会い、社交界や新聞・雑誌が供する Ethelberta についての様々な憶測や解釈を読み聞きし、彼女の元侍女のゴシップを耳にし、彼女の近親者達が彼等が理解するところの彼女の性格について言い交わすのを聞かされたりする。登場人物達が皆、不思議なほどに Ethelberta について興味津々で、彼等が彼女を遠目近目に眺めつつ彼女のことを知りたいと願っている様子が、至る所で描かれているのである。HE という小説は、作中人物達がヒロインについてがやがやと色々なことを言っているのを聞くうちに、読者自身が、彼女は一体どのような人物なのかを見極めていくことを促している作品であるかのように思えてくるのである。

少なからぬ批評家が Ethelberta の像について言及する際には、*unknownability* ということを挙げる。そして、その論拠として彼等がしばしば引用するのが、ある社交界婦人の Ethelberta についての発言である (“‘[...] She is one of those people who are known, as one may say, by subscription: everybody knows a little, [...]; but nobody knows her entirely. [...] it is through her being of that curious undefined character which interprets itself to each admirer as whatever he would like to have it. [...]’”^③)。確かに、この婦人の言葉には、複数の解釈を許す変幻自在的な「奇妙に確定しがたい」Ethelberta 像が表されている。しかし、この種の人物に関する情報については注意が必要である。作中人物の人物造形 (*characterization*) を考え

る際、その人物のイメージや性格が構築されていくのに用いられるテキスト上の情報がどのようなものであるかを十分に認識することが大切である。登場人物構築のためのテキスト上の要素には、権威のある語り手により明示される性格特性名の他に、間接的・暗示的なものがある。それは、読者がそれから性格特性名を推論して引き出さなければならなかったり、明示的に特性名が言及されていてもそれらが真実であることの究極的な保証がない、というものである。例えば、対象となっている作中人物の外観・行動・環境についての記述、他の作中人物のその人物についての意見、あるいはその人物の名前とかその人物に関わる文体的特徴といったメタフォリカル及びフォーマルな側面、が間接的要素である。また、含意された作者 (implied author) (HE のような三人称ナレーター小説の場合は「語り手」と同一化して知覚される^⑤) の作中人物に対する態度、というものの人物構築のための間接的要素に加えることができよう。というのは、含意された作者と登場人物の関係は、読者とその人物の関係を操作するものであり、必然、読者の人物構築の推論活動に大きな影響を与えるものとなるからである。

従って、先の引用に戻ると、全知の語り手による発言とは異なり、厳密には真実であるという絶対的な保証のない作中人物によるこの見解をそのまま額面通りにとって、Ethelberta の人格は unknowable という言葉で規定できるように議論することは、少々性急であると言える。確かに、Ethelberta は最終的には不可知的存在となるが、それはこの社交界婦人の言葉があるからではないし、彼女の発言の現れるような早い段階 (48章中9章) でも起こらない。

Ethelberta は他の登場人物に絶えず語られ見られる人物であると述べた。だが、彼女の像を造形するための情報は作中人物を通しての知識や憶測ばかりではない。他の作中人物にとっては Ethelberta は謎であることが繰り返し強調される一方で、語り手は驚くほど読者に対しては彼女について率直である。こうした語り手の傾向は小説が始まった段階で既にある程度現れている。小説冒頭部は二人の労働者の Ethelberta の噂話であると述べたが、もう少し正確には、語り手は、このアクションとして物語を始める前にまず最初の二段落で、Ethelberta の素性と物語開始時点までの彼女の経歴—まさしく、馬丁と牛乳配達屋が好奇心を持って語り合っているが不明である事柄—について、いとも簡潔に要約して読者の前に露呈してしまうのである。この

ように、小説の冒頭で読者が出会うのは、他の作中人物の知り得ない Ethelberta に関する情報を読者には隠し立てなく知らせてしまうような類の語り手なのである。同様に、小説の他の部分においても、最終章を除いては、彼女の人物構築のための材料はふんだんに提供される。介入的な語り手による Ethelberta の言動や心理についての評釈もあれば、彼女の感情や思考などの内面の働きの描写や報告もある。他の登場人物による Ethelberta に関する発言は、情報提供の機能というよりはむしろ、読者の好奇心を掻き立てるもの、つまり、一体どの登場人物の言っていることが正しいのか、彼女を真に理解する者はいのだろうか、自分こそ本当の Ethelberta を知りたい、と読者に考えさせることで彼等の Ethelberta の性格推論の活動を活発化させるもの、としての機能の方が主であると思われるのである。

その他、批評家達の解釈する Ethelberta については、小説で採られている視点は彼女を疎外し批判するものであるという意見や (Widdowson; 永松 1996; Dolin, 35), Ethelberta は自らの人生を選択する能力を持つ自立した強い女性を讃美する、あるいは表象するものであるという意見がある (Short, 51, 56-57; Roberts, 92; Davies)。筆者は、これらの見方にも、Ethelberta の人物造形の証拠材料を包括的に吟味していないところからくる誤ちがみられると思うのである。例えば、Widdowson は Ethelberta の表面 (顔) と内面の乖離を一つの理由に Ethelberta の疎外論を主張するが (74), 後述するように、この作品では彼女の感情の抑制力は必ずしも彼女の人格の価値を下げるものとしては機能していない。HE は上流階級の人間達を辛辣に揶揄する作品であり、従って、下層階級出身でありながら愚かな上流階級の一員に加わる Ethelberta を語り手は批判している、とした論もあるが (永松, 62), 本稿末で触れる Mountclere 卿に対する語り手の態度の曖昧性に暗示されるように、語り手の上流階級に属する作中人物に対する態度はそれほど単純明快に否定的なものではない。「強い Ethelberta」を唱える論陣については、例えばフェミニスト評者 Davies は、Ethelberta と Christopher の関係について、‘she was immeasurably the stronger; and the deep-eyed young man fancied, in the chagrin which the perception of this difference always bred in him, that she triumphed in her superior control’ (138) という小説の部分を引用し、Hardy は家父長制社会の伝統的な男女の力関係を覆す女性像を表そうとしているのだ、と論じる (124)。しかし厳密

には、この引用部は、Christopher の思いを語り手が報告したものすぎない。事実、この部分のすぐ後に語り手は次のような評をつけ、Christopher の感じていることが事態の真相を映したものではないことを明確にしているのである（‘Yet it was only in little things that their sexes were thus reversed: Christopher would receive quite a shock if a little dog barked at his heels, and be totally unmoved when in danger of his life’ [138]^⑥）。

このように Ethelberta の人物造形の過程に焦点を合わせてこの作品全体を注意深く読むと、一般に言われているような enigmatic, alienated, strong というのとは随分違った Ethelberta 像が浮かんでくるのである。勿論、これらの要素の存在を全く否定するわけではない。ただ、この、世間馴れし、何人もの求婚者に yes とも no とも言わずに気を持たせ、斬新な企画心に溢れ、自分の才能一つで家族を養おうと気負い、嘘で固められた二重生活をしている、強く、大胆で、無節操に見える Ethelberta が、意外にも vulnerable, naïve, ordinary, honest, altruistic であり、このような彼女に対し語り手は、「距離をおいた」とか「疎外する」などというよりはむしろ、「思い遣り」と表現した方がよいような態度をとっているのがみえてくるのである。小論では、これら未だ十分に顧みられてこなかった Ethelberta の意外な面を明らかにしていき、語り手と Ethelberta の関係を見直していくことで、Ethelberta の人物像に新しい理解を投じてみたいと思う。

II

Ethelberta の思いがけない無防備さが見い出される一つの例が、Ethelberta と妹 Picotee の関係である。無邪気、世間知らず、素朴な Picotee は、Ethelberta とは対照をなす人物として提示されている。彼女が、強く賢い貴婦人然とした姉に心から感服していて、自分の意志を持つ気などさらさらなく、姉に自分の人生をすっかり預けてしまい安心しているような娘であることは、以下の通り語り手に記されている。

Picotee was quite an unreasoning animal. [...] Ethelberta did everything for her, in short: and Picotee obeyed orders with the abstracted ease of mind which people show who have their thinking done for them, and put out their troubles as they do their washing. She was

quite willing not to be clever herself, since it was unnecessary while she has a much-admired sister, who was clever enough for two people and to spare. (146)

ところが、この主・従、強・弱、依存される者・依存する者、といった言葉で図式化できるような二人の上下関係がにわかに逆転してしまう箇所があるのである。それは、Christopherを追ってLondonにやってきたPicoteeが、彼が実は姉の恋人であったことを知り、その後、Ethelbertaをじっと観察する様子が描かれている箇所である。何かの理由でChristopherと一時的に仲違いしてしまったらしいEthelbertaの感情の動向の細微を追うPicoteeの眼差しは、もう既に裏表のない無垢な人間の持つ透明なものではなく、強いinterest(=関心, 利益)に彩られたものとなる(‘[Picotee] had an opportunity of observing Ethelberta’s emotional condition with reference to Christopher, which Picotee did with an interest that the elder sister was very far from suspecting’ [153])。ここでは、PicoteeのLondonにやってきた本当の理由も、Picoteeが彼女とChristopherの関係を知っていることも知らないEthelbertaこそ、無邪気であり、無防備にPicoteeの視線に晒されるのである。事実、この箇所の前後では、‘wily’, ‘clever’といった言葉がPicoteeを形容する。Picoteeは、偽善的な宗教者のように巧みに自分の上京の真の理由を言いはぐらかしたり、Ethelbertaが待っている訪問客がChristopherであることを知りながらも無知を装おうのである(‘as wily as a religionist in sly elusions’ [152]; “‘When she comes [...]” said clever Picotee’ [154])。嘘や演技などということに無縁であったように思われたPicoteeが、このように狡猾さの片鱗をちらつかせるのに対し、直ぐに、
 “‘It is not a lady,” said Ethelberta blandly. [...] “I may as well tell you, perhaps. [...] It is Mr Julian. He is — I suppose — my lover, in plain English”’ (154) と隠し立てせず答えるEthelbertaの方にこそ、後ろめたいものがない者の直截さが窺える。こうしてここでは、innocentであったはずのPicoteeがcleverの側にまわり、cleverであったはずのEthelbertaがfrankになり、立場が逆転するのである。注意したいのは、ここでPicoteeが強くなったとか人格が悪くなったとか言うのではない。彼女は相変わらず気弱で単純、意識的に策略をたてて実行するといったような度量や才覚は持たない。

ただ、Picotee ほどの弱い性格の、演技することにおいては Ethelberta に比べて格段に素人であるような人物さえに見透かされる対象になってしまうこともあるというところに、Ethelberta は万能で強いばかりに見えたが、実は彼女には意外な脆さがあるのではないか、という発見があるのである。

Picotee と Ethelberta の関係は、Ethelberta の明らかに賞賛されるべきである「自己犠牲」や「利他的」といった特質を表出させる働きもする。Picotee が Christopher を愛していることを察知した Ethelberta は動揺するが、そこで語り手は、彼女の頭に最初に浮かんだのは自分のことではなく Picotee の幸福であり、しかもそうした感情は Ethelberta に典型的なものなのだ、と明言する（‘It was characteristic of Ethelberta’s jealous motherly guard over her young sisters that, amid these contending inquiries, her foremost feeling was less one of hope for her own love than of championship for Picotee’s’ [175]）。似たような語り手の表現は繰り返され、Ethelberta の愛他的な性質が強調される（‘Ethelberta, though of all women most miserable, was brimming with compassion for the throbbing girl [...]’ [176]）。さらに続いて、読者は、Ethelberta が殆ど逡巡することもなくまるで当然のことにように直ちに Picotee のために自分と Christopher との結婚を諦めるという犠牲を払うことにするのを、Ethelberta の思考内容を報告する語り手の言葉の中に知る（‘The intended ways of her life were blocked and broken up by this jar of interests, and she wanted time to ponder new plans’ [176]）。しかも、自分の犠牲を認められたいとか感謝されたいなどという気持ちが Ethelberta には皆無であることが、ここで彼女が彼女の特技である感情の抑制を行っているところから分かるのである。

Ethelberta had far too heroism to let much in this strain escape her [...].

[...] continued Ethelberta, in the quiet way of one who had only a headache the matter with her [...].

But it was necessary to repress herself awhile [...]. (176)

感情の抑制、内面と外面の完全な乖離、ということは、この小説の他の部分では、上流社会の人間に特徴的な行動様式として戯画化されている（例えば、7章の Doncastle 邸に集まった客達の描写 [75-76]）。従って、16章で語り手が、感情を出さずに演技することのできる ‘self-command’ が Ethelberta の特異な能力である、と説明した部分、

It was in performing this feat that Ethelberta seemed first to discover in herself the full power of that self-command which further onward in her career more and more impressed her as a singular possession [...]. [...] yet, had Ethelberta been framed with less of that gift in her, her life might have been more comfortable as an experience, and brighter as an example, though perhaps duller as a story. (133-134)

は、この性質が彼女の分裂性と疎外性を示唆しているのだ、と解釈される向きがあった (Widdowson, 60)。しかし、そこでの語り手の説明に自己制御という特質が彼女の人格の欠陥である、という決定的な証拠があるわけではない。語り手は、この才能ゆえに彼女の人生は安逸で楽しいものとはならないのだと予見しているにすぎず、Ethelberta の人格について善し悪しの判断を下しているわけではない。そこで予期されている uncomfortable な経験の一つの事例が、四十数頁後に語られることになる、感情表出抑制力を行使することにより妹のために自分の恋人を放棄し、しかもその自己犠牲の恩恵を受ける妹に犠牲があったことがわからないようにする無私無欲の行為である、とも考えることができるのである。実際、上にみた176頁の引用中で感情的な言葉や態度を抑えようとする彼女について ‘heroism’ という言葉が使われていることから分かるように、Picotee との関係の中で彼女がみせる感情抑制という特性は、欠陥ではなく崇高なものとして提示されている。

Ethelberta がついに Christopher との別れを実行する場面では、特に、Ethelberta がこの感情抑制の能力を最大限に行使している様子が描かれる。

‘Come here, Picotee,’ said Ethelberta. [...]

‘Mr Julian is going away,’ she continued, with determined firmness.

‘He will not see us again for a long time.’ And Ethelberta added, in a

lower tone, though still in the unflinching manner of one who had set herself to say a thing, and would say it — ‘He is not to be definitely engaged to me any longer. We are not thinking of marrying, you know, Picotee. It is best that we should not.’ (188)

ここでの ‘with determined firmness’, ‘in the unflinching manner [...]’ といった表現に、語り手による Ethelberta への批判があるとは考えられない。少なくとも、小説の他の部分で上流社会の非人間性や虚偽の現れとして揶揄されている、表層の振舞と真の感情との隔絶、と平行させて、Ethelberta の感情抑制という特質を語り手により弾劾されたものと捉えることは無理である。この Ethelberta の特性は、自己犠牲を断固として貫こうとするあくまで利他的で英雄的な美徳の一部として称えられているのである。

III

Ethelberta は真に愛している Christopher との婚約を破棄し、家族の生活の安泰と発展のための結婚をすることを決心する。だが、彼女が Christopher を諦めたのは、彼の貧しさが第一の理由であったからではなく、Picotee のために自らが身を引くことが直接の原因であったことはみてきた通りである。さて、Ethelberta がこのようにして図らずながらも打算的結婚を決意することになった頃から、語り手は彼女が周りの者にとってますます判らぬ存在になっていくことを強調する (‘it was noticed afterwards that about this time in her career her openness of manner entirely deserted her’ [194-195]; ‘She had at this juncture entered upon that Sphinx-like stage of existence in which, contrary to her earlier manner, she signified to no one of her ways, plans, or sensations [...] [217]’). ところが、Ethelberta を知る材料が他の作中人物達にとり減るのと反比例するかのようになり、読者の彼女の内面についての情報は増えるのである。これ以後、Ethelberta の内面描写はより多く深くなっていき、語り手の Ethelberta についての介入的な評釈も顕著になってくる。それに伴い、意外な「弱い Ethelberta」の側面、語り手の同情的・擁護的な態度、もより明らかにみえてくるようになるのである。小説の前半では、例えば、貴婦人ぶりを演技する彼女を見せ物の熊に喩えるなど (34)、語り手が Ethelberta に対し冷ややかな態度を取っている

と言える部分がなかったわけではない。しかし、小説後半部つまり財産目的の愛のない結婚をすることを選択するヒロインの行為を語るという部分—になって、語り手は彼女により接近した共感的語りに移行し、この外面的には明らかに美德とは言えない Ethelberta の行動が彼女の人格を低めてしまわないように実に注意深く取り計らうのである。

Christopher との決別のあと、物語の関心の中心は、Ethelberta と彼女の三人の求婚者である Ladywell, Neigh, Mountclere 卿との関わり合いに移る。この関係について詳細に当たる前に注意を喚起しておきたいことが数点ある。一つは、Ethelberta は決して自分から積極的にこれらの男達を惹き付けようとしていないことである。Christopher に対してはそうではなかった。自分の詩の本を送りつけたり、ダンスの伴奏者としてわざわざ名指しで呼び寄せて他の男達と踊る姿を眼前で見せつけたりと、このようなことを Christopher に対して行う Ethelberta の動機は、彼の彼女への愛情を再び焚き付けることであると思えない。しかし、Ethelberta はこれらに対応するような意識的に挑発的な行動を三人の求婚者には一切行っていないのである。Christopher については、彼女は彼を真に愛し、実際、結婚を願っていたのだから、彼女の彼に対する行動を取り上げて彼女を愛情と無関係に男を魅惑することに快楽を求める flirt と決めつけることはできない。確かに Ladywell と Neigh についても、彼等が自分に夢中になっていることを知った時には彼女がまんざらでもないことは、語り手は率直に述べる (158, 194)。しかし、このように虚栄心をくすぐられて快く感じるのは、必ずしも性格の邪悪さに直結するものではなく、むしろ Ethelberta の女性としてのごく自然な反応を示すものであると考える。男性からの崇拜に対する欲求は、Hardy の小説では Fancy, Eustacia, Bathsheba といった他のヒロイン達をはじめ殆ど総べての女性が何らかの形で持っており、これが Hardy には普遍的な人間の性的属性と捉えられていたことが推測される。裏を返せば、女性の虚栄心は正常な人間であることの証しであるということもできるのである。HE においても、あの女性性がまるで欠如しているかのような Faith でさえ、容姿を気にして眼鏡をかけている姿を人目から隠そうとするのである (47, 164-165)。Ethelberta と Mountclere との関係については、彼のような大貴族を結婚相手に仕留めようなどという大それた考えは Ethelberta には毛頭なく、彼のプロポーズが晴天の霹靂であったことが随所

の彼女の発言や内面描写で分かるようにされている (239, 264-265, 275, 289)。

二つには、この結婚があくまで自分の幸福を顧みない、ひたすらに家族のためのものであること、すなわち自己放棄的な利他的行為であることが、Ethelberta の思考の報告において明白に示されていることである (‘A doubt whether [her position] was worth securing would have been very strong [...], had not others besides her been concerned in her fortunes’ [266])。彼女が社会的上昇のための奮闘に疲れて学校教師になる決意を家族に打ち明けた際、それが家族の反対により覆されてしまうという一面は、彼女の社会的野心というのはそれほど強いものではないこと、もし彼女の肉親を思う気持ちがなかったなら、あるいは家族からの圧力を感じることがなかったならば、彼女は自分の野心など未練なく捨てていただろうことを、読者に知らせる (‘The arguments of her relatives seemed ponderous as opposed to her own inconsequent longing for escape from galling trammels. [...] to cause them pain for life, was a grievous thing’ [294-295])。このように、彼女の人生の選択は完全に自分の自由意志によるものだったわけではなく、家族という非常に影響力の大きい要因を含む彼女を取り巻く状況の中で選ばざる得なくして選ばれた道なのであり、^⑦そういう意味では彼女も究極のところ境遇の犠牲者なのである。

最後に、Ethelberta が財産目当ての計画的な結婚に一直線に目標見紛うことなく突き進んだのではなく、疑い、迷い、悩み、不安を感じていることである。Mountclere 卿との結婚を決心するにあたり、J. S. Mill の *Utilitarianism* にそのような自己犠牲的行為に対する理論的正当化を求め、挫けそうになる自分を勇気づけようとしたりしていることなどが、そのよい例であろう (295-296)。語り手が、Ethelberta の Mill この理論応用を、‘By a sorry but unconscious misapplication of sound and wide reasoning did the active mind of Ethelberta thus find itself a solace’ (296) と評しているところには、彼女のそれはお粗末な素人的解釈であっても本人は一生懸命である健気さに対する語り手の哀れみが込められているように感じられる。迷い、揺れ動くのは彼女の普通の人間としての正常さを表すもので、彼女が完璧な決断力と判断力を持つ超人間的な化け物でもなく、彼女の心が冷徹な機械でもないことを示すのである。

では、もう少し細かく、Ethelberta の意外な弱い側面、語り手の擁護的な態度、が求婚者達との関わりの中で現れている事例を幾つかみていこう。まず、Neigh の所有地を調べに出かけるという Ethelberta の行動を語り手はどのように取り扱っているだろうか。Neigh が “‘I mean to marry that lady’” と言ったという噂を耳にした Ethelberta は (194)、Neigh が所有しているという地所の規模・価値を知りたいという思いに駆られる。その時の彼女の心理を語り手は次のように報告する。

The exact size and value of the estate would, she mused, be curious, interesting, and almost necessary information to her who must become mistress of it were she to allow him to carry out his singularly cool and crude, if tender, intention. Moreover, its importance would afford a very good random sample of his worldly substance throughout, from which alone, after all, could the true spirit and worth and seriousness of his words be apprehended. (196)

この一節の一文目と二文目の間で、Ethelberta の人格を守るための微妙な操作が行われていることに注目したい。初めの文は、‘almost necessary’ と、‘almost’ を付けて歯切れの悪い調子ながらも Ethelberta の動機が結婚相手の財産による品定めであることを示すのだが、‘Moreover’ で始まる二番目の文は、彼の財産状態を知ることが Neigh の言葉の真意を知るための唯一の手立てである、というように金銭から離れた動機もあることを示す。この二文目は、その先に仄めかされた mercenary な動機の上塗りをしてしまう効果を持つ。こうして語り手は Ethelberta の動機が徹頭徹尾金目当てでないことを表すのである。語り手はこの後、‘She was piqued into a practical undertaking by the man who could say to his friend with such sangfroid, “I mean to marry that lady”’ (197) と続けて、このような行動に出たのは彼女の性格が原因なのではなく、Neigh の方に責任があるのだ、とはっきり述べる。さらに念押しするかのように語り手は、彼女の計略的結婚を企む心理には ‘palliative’ な点があるのだとも指摘する。つまり、将来、夫に依存せずにすむ確固とした経済的自立を築く切っ掛けを得るための結婚であり、決して ‘meanly to ensnare a husband just to provide incomes for her and her

family'ではないのだと(220)。このようにして、Ethelbertaの人格は守られるのである。

語り手はその他、Ethelbertaが自分の出自を隠して上流社会の一員として振る舞っていることについて、彼女が自分のことを偽物であると自己卑下する必要もないし、実際、彼女は偽物ではないのだ、という判断を提示することによっても、Ethelbertaへの擁護の態度を明らかにする。これは Neigh とだけではなく Mountclere との関わりが語られている所でも見られる ('melancholy and mistaken thoughts of herself as a counterfeit' [205]; 'her over-sensitiveness to a situation in which a large majority of women and men would have seen no falseness' [306])。

「思い遣り」という語り手の態度は、弁護として表現されるばかりではない。Ethelbertaと求婚者達との関わりを描く中で、語り手は、積極的に彼女の道徳的高潔さを明らかにすること^⑧もしている。自分が下層階級出身であることを明かさぬまま結婚することは、彼女の'honesty'が許さないということは何度も言及される。例えば、Neighに関しては、彼を騙すことが可能であってもその誘惑に負けない彼女の道徳的堅固さが強調される('It would be possible to lead him to marry her without revealing anything — the events of the last few days had shown her that — yet Ethelberta's honesty shrank from the safe course of holding her tongue [220]')。あるいは Mountclere 卿のプロポーズに対しては、Ethelbertaが、Casuistryの本に助言を求めた後でさえも自分の良心を曲げることはできないと感じ、彼に全てを話してプロポーズを取り下げるチャンスを与えることを決心する思考過程が描かれるのである('This author she found to be not so tolerable; he distracted her. She put him aside and gave over reading, having decided on this second point, that she would, at any hazard, represent the truth to Lord Mountclere before listening to another word from him' [297])。

語り手は、Ethelbertaの弱さ、無防備さ、知識・経験の不十分さ、を示していくことによっても、彼女が読者の共感と同情を受けることができるようにする。小説始めて Picotee に恋のテクニックについてとうとうと講義した Ethelberta の世間馴れした洗練された都会的な面や(72-74)、兄の Dan が言うような気位の高さは(124)、影を潜めるのである。例えば、何か見通すことのできないものを持っている Neigh に怖れを感じる Ethelberta を、

語り手はこう説明する。

She knew little of the nature of the town bachelor [...]. Not withstanding her exaltation to the atmosphere of the Petherwin family, Ethelberta was very far from having the thoroughbred London woman's knowledge of sets, grades, coteries, cliques, forms, glosses, and niceties, particularly on the masculine side. Setting the years from her infancy to her first look into town against those linking that epoch with the present, the former period covered not only the greater time, but contained the mass of her most vivid impressions of life and its ways. (207)

彼女の世界観の土台を築いているものが、実は「田舎育ち」であったことがここでわかに明らかにされる。この引用部分で感じ取られるのは、上流階級という世界を手探りで足下おぼつかなく行く Ethelberta である。助けなど無用、とばかりに自信に溢れているのみが Ethelberta の姿ではないのである。ましてや、男という獲物をねらう predator のようなイメージを彼女に重ねることはとてもできない。

Mountclere と Ethelberta の関係が語られていく小説の部分でも、彼女の弱い面は随所で露わにされる。例えば、考古学同好会の遠足にやってきた紳士淑女達にただ一人で対面しなければならない立場に追い込まれた時、彼女の最初の本能は逃げることである (248)。その他の例としては、Mountclere 卿に執拗につけ回されてようやく叔母夫婦が経営する Rouen のホテルに辿りつくというエピソードにおいて、彼女に子供のイメージが重ねられていることが挙げられる。叔母の顔に自分の母親の面影を見て安堵し感謝する気持ちで胸が一杯になる Ethelberta に、我々は彼女が実はまだ母親の保護を必要とするような無防備な「子供」であったことに気付かされるのである (‘Her audacity, like that of a child [...]’ [269]; ‘a face in which she saw a dim reflex of her mother’s was soothing in the extreme, and Ethelberta went up to the staircase with a feeling of expansive thankfulness’ [271])。

以上みてきたように、これほど語り手に擁護がなされているヒロインが、作品において皮肉・批判の攻撃的になっていると考えられないのは明らか

であろう。ここにいるのは、冷ややかな揶揄でEthelbertaとの間に距離を保つ語り手ではない。彼女を守ろうする思い遣りを感じさせる語り手である。

IV

本稿では詳しく論じる余裕はないが、(1) Mountclere 卿に対する語り手の態度が嘲笑的なものであるのか、肯定的なものであるのか断定できない曖昧さ、(2) Ethelberta の Mountclere に対する態度の特異さ、そして、(3) 小説の最後の Mountclere 子爵夫人になった Ethelberta を語るという部分になって、突然、語り手による彼女の内面描写・報告が一切消え、語り手による評釈も皆無となるという物語の終結法、も語り手の Ethelberta を保護しようとする態度と結び付けて考えることができる。ここではこれまでに指摘のなかった二番目の点についてのみ簡単に述べる^⑨。他の登場人物達がそろって否定的に Mountclere を受けとめている中で、彼を不快に感じたりする様子は一度もなく、むしろどちらかというと一緒にいて楽しい人と好意的に思っているようである Ethelberta の態度は、突出していて注目に値する。Doncastle 邸での晩餐会の翌朝の Picotee との会話の中で、Mountclere をからかう発言をする Picotee に対し、Ethelberta が彼を弁護しているところからも明らかのように (239)、彼との結婚の可能性など夢にも思っていない彼との初対面直後の頃からそうなのであるから、爵位と財産に惹かれて Mountclere を嫌からず思っているという理由は成り立たない。語り手は Ethelberta が、たとえ愛してはいなくとも、Mountclere に好意と敬意を持っていること、そしてそれが金や地位に左右されたものではなく彼女の正直な気持ちであること、を示すのである。もし、彼女が Mountclere に嫌悪感や軽蔑心を抱いていることが一度でも描かれていたら、彼との結婚はまさしく非人間的な金だけが目当ての純粋に打算的な結婚になってしまっていただろう。こうして、HE における Ethelberta の Mountclere に対する肯定的態度は、彼女の人格を下げない役割を果たすと同時に、この結婚が必ずしも軽蔑すべきものとして語り手に否認されているわけでないことを暗示する。上記の他の二点も同様に、Mountclere と Ethelberta の結婚の善し悪しの決定的な判断を読者が下すことを不可能にすることで、読者がこの結婚を理由に Ethelberta を弾劾するのを防ぐように機能する。

小論では、Ethelberta は Hardy の分身であるという自伝的要素とは切り

離した、テキストに基づいた分析を行った。だが、ここで明らかになった、語り手の Ethelberta への思い遣りの態度、ということは、Ethelberta=Hardy という仮説を補強するものとして利用することも可能であり、結果としてこれのテキスト的裏付けを提供することになったと言うこともできよう。

註

- ① Hardy 自身による自作の小説の三分類のうち、出来事の連結性という点においては必ずしも厳密なリアリズムには囚われずに書かれた「実験的」な「一度限り」の性質のものであるとされる第三グループ（‘Novels of Ingenuity’）に含まれる HE は、批評家達にはほぼ一貫して軽視されてきた。HE を弁護する論文は散発的に発表されてはきたものの（例えば、C. Short 1958, Ward 1971, Widdowson 1998）、それらは少数派の域を出ていない。
- ② Ethelberta を、1875、6 年当時の Hardy の心理的・社会的・物理的状況が投影された人物と前提する批評態度はかなり一般的なものである。例えば、Gittings; Bayley (1978), 149-151; Ball (1986); Roberts (1994); Blishen (1996); Dolin (1996); Widdowson。
- ③ Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1975), 94. 以後、作品からの引用は本文中に頁数のみ示す。なお、この部分を引用する批評家には、例えば、Davies (1993), 26; Dolin, 38-39 がいる。
- ④ 物語理論家による人物造形理論については、Chatman (1978), 119-134; Rimmon-Kenan (1983), 59-70; Margolin (1983, 1986, 1990) を参照。
- ⑤ Leech and Short (1981), 266 を参照。
- ⑥ Davies がこの後続部分を見逃しているのは奇妙である。彼女の論文は ‘the strategic reading of a modern feminist critic’ (123) というフェミニズム批評批判への反論のはずなのだが、結局のところ彼女も自分のイデオロギーに沿わせるための偏った読み方に陥っているとの謗りを免れそうにない。
- ⑦ 批評家達は概してこれと反対の意見を Ethelberta に対して持つ。例えば、C. Short は、彼女は ‘the dupe or victim of circumstances’ でないところが他の Hardy のヒロインと異なるところであるとする (51)。
- ⑧ 驚くべきことに、Ethelberta のこの特質に留意する批評家は非常に少ない。但し、C. Short, 52 を参照。
- ⑨ Wing は、語り手の Mountclere に対する寛容の態度が、HE を風刺として不備なものにし、HE の失敗の一因となっていると論じる (573-577)。Roberts は、Ethelberta との近さゆえに Hardy は彼女の内面に深く覗きいることに堪えられなかったのだろうと考える (92-93)。

参考文献

- Ball, David. 1986. 'Hardy's Experimental Fiction.' *English* 35.151: 27-36.
- Bayley, John. 1978. *An Essay on Hardy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blishen, Edward. 1996. 'Hardy, *The Hand of Ethelberta*, and Some Persisting English Discomforts.' *Celebrating Thomas Hardy: Insights and Appreciations*. Ed. Charles P. C. Pettit. London: Macmillan. 177-195.
- Chatman, Seymour. 1978. *Story and Discourse*. Ithaca: Cornell University.
- Davies, Sarah. 1993. 'The Hand of Ethelberta: de-mythologising "woman".' *Critical Survey* 5.2: 123-130.
- Dolin, Tim. 1996. Introduction. *The Hand of Ethelberta*. London: Penguin. 19-39.
- Gittings, Robert. 1975. Introduction. *The Hand of Ethelberta*. London: Macmillan. 15-28.
- Hardy, Thomas. 1975 [1876]. *The Hand of Ethelberta*. The New Wessex Edition. London: Macmillan.
- Leech, Geoffrey N., and Michael H. Short. 1981. *Style in Fiction*. London: Longman.
- Margolin, Uri. 1983. 'Characterization in Narrative: Some Theoretical Prolegomena.' *Neophilologus* 67.1: 1-14.
- Margolin, Uri. 1986. 'The Doer and the Deed: Action as a Basis for Characterization in Narrative.' *Poetics Today* 7.2: 205-225.
- Margolin, Uri. 1990. 'The What, the When, and the How of Being a Character in Literary Narrative.' *Style* 24.3: 453-468.
- 永松 京子. 1996. 「*The Hand of Ethelberta* における intentional improbability」『日本ハーディ協会会報』No. 22, 52-67.
- Rimmon-Kenan, Shlomith. 1983. *Narrative Fiction*. London: Methuen.
- Roberts, Patrick. 1994. 'Ethelberta: Portrait of the Artist as a Young Woman: Love and Ambition.' *The Thomas Hardy Journal* 10.1: 87-94.
- Short, Clarice. 1958. 'In Defense of *Ethelberta*.' *Nineteenth-Century Fiction* 13: 48-57.
- Ward, Paul. 1971. 'The Hand of Ethelberta.' *The Thomas Hardy Yearbook* 2: 38-45.
- Widdowson, Peter. 1998. 'Hardy and Social Class: *The Hand of Ethelberta*.' *On Thomas Hardy: Late Essays and Earlier*. London: Macmillan. 45-92.
- Wing, George. 1972. "'Forbear, Hostler, Forbear!": Social Satire in *The Hand of Ethelberta*.' *Studies in the novel* 4: 568-579.